



2022.9

嵯峨嵐山文華館
福田美術館

報道関係者各位

企画展開催のお知らせ



嵯峨嵐山文華館 × 福田美術館 二館共催

企画展「芭蕉と蕪村と若冲」

日時 2022年10月22日(土)～2023年1月9日(月祝)
○前期/10.22～11.28 ○後期/11.30～2022.1.9
10:00～17:00 (最終入館16:30)

主催 嵯峨嵐山文華館・福田美術館・京都新聞

後援 京都府・京都市教育委員会・京都商工会議所

作品総数：153点

○嵯峨嵐山文華館：80点 (前33/後32/通15)
→うち初公開/23点
○福田美術館：73点 (前31/後29/通13)
→うち初公開/6点

※作品点数は変わる可能性があります

松尾芭蕉自筆《野ざらし紀行図巻》が初公開！

俳諧という文芸を和歌とならぶ文学的地位へ高めた松尾芭蕉。この度、芭蕉が40代の頃に自書した《野ざらし紀行図巻》が約50年ぶりに再発見され、福田美術館にて初公開されます。芭蕉自筆による「野ざらし紀行」は、これまで天理本（天理大学附属天理図書館蔵）以外に本作しか確認されておらず、書と共に紀行文全体にわたって挿絵が描かれている点が大変珍しいものです。冒頭の前に芭蕉と交流があった山口素堂による序文が添えられており、『芭蕉全図譜』（岩波書店）記載の筆跡と比較検討しても、真筆であると確認されています。



与謝蕪村《松尾芭蕉像》



松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》／山口素堂による序文（右）と冒頭部分（左）

<野ざらし紀行の経路図>



与謝蕪村をキーパーソンとして

芭蕉の死後50年が経過した1743年頃から、芭蕉を顕彰する動きが盛んになりました。この運動を京都で牽引したのが与謝蕪村です。蕪村は20代から江戸で俳諧を学んだ後、およそ10年間かけて、北関東から東北地方を僧侶として遊歴。各地の歌枕や芭蕉が訪ねた場所を巡りました。42歳頃から京都に定住し、中国の南宗画に学びながら山水図を描き、以後絵と発句を書き添えた「俳画」という新しいジャンルを確立しました。

本展は、与謝蕪村と蕪村が憧れた松尾芭蕉、蕪村と同じ年に生まれた伊藤若冲、三人の足跡を辿るものです。



松尾芭蕉《「朝顔に」自画賛》(部分)



与謝蕪村「いかだしの」自画賛(部分)



伊藤若冲《牡丹図》(部分)

第1会場：嵯峨嵐山文華館

第1会場の嵯峨嵐山文華館では、芭蕉の俳句や絵画と共に、後世の画家たちが描いた《芭蕉図》の数々を展示。また、芭蕉に憧れてやまなかった蕪村の手による俳画もご紹介します。さらにパトロンや弟子たちとの関係が窺える蕪村直筆の手紙や、弟子たちの作品もご覧いただきます。全ての作品に解説を設置し、ていねいにご紹介いたします。



中村芳中《芭蕉像》(部分)



伊藤若冲《蕪に双鶏図》(部分)

第2会場：福田美術館

蕪村と同じ年に京都で生まれた伊藤若冲は、四条通界隈の非常に近い場所に住んでいたにもかかわらず、互いの交流を示す史料は確認されていません。第2会場となる福田美術館では、松尾芭蕉の《野ざらし紀行図巻》の特別公開(2F展示室/通期/全て公開)とともに、若冲筆の《蕪に双鶏図》や蕪村筆《猛虎飛瀑図》など、若冲と蕪村の代表作を多数展示いたします。当時の最先端の技法を真摯に学びとり、己の画風に取り込もうとした2人の努力の跡をご覧ください。

※期間中一部展示変えあり

企画展概要

企画展名	「芭蕉と蕪村と若冲」
開催日程	2022年10月22日（土）～2023年1月9日（月・祝） ●前期…2022年10月22日（土）～11月28日（月） ●後期…11月30日（水）～2023年1月9日（月・祝）
主催	嵯峨嵐山文華館・福田美術館
後援	京都市、京都府教育委員会、京都商工会議所
休館	11/29（火）、年末年始（2022年12月30日～2023年1月1日）
場所	○第1会場…嵯峨嵐山文華館 〒616-8385 京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町11 http://www.samac.jp/ ○第2会場…福田美術館 〒616-8385 京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16 https://fukuda-art-museum.jp/
料金	< 嵯峨嵐山文華館と福田美術館の二館共通券 > 一般・大学生 ¥2,000/高校生 ¥1,000/小中学生 ¥550 障がい者と介添人1名まで 各¥1,000 < 嵯峨嵐山文華館 > 一般・大学生 ¥900/高校生 ¥500/小中学生 ¥300 障がい者と介添人1名まで 各¥500 < 福田美術館 > 一般・大学生 ¥1,300/高校生 ¥700/小中学生 ¥400 障がい者と介添人1名まで 各¥700

担当学芸員：岡田秀之
広報：中島真帆

本展に関するお問い合わせ

福田美術館・嵯峨嵐山文華館 広報事務局（ウインダム内）

TEL 03-6661-9448 FAX 03-3664-3833

Email 福田美術館：fukudamuseum@windam.co.jp ←野ざらし紀行図巻の記事に関してはこちら
嵯峨嵐山文華館：samac@windam.co.jp

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9-4F
「福田美術館」広報事務局

担当：沼澤、多田

芭蕉と蕪村と若冲 プレス用画像一覧_1 (福田美術館展示)



01 松尾芭蕉
《野ざらし紀行図巻》
(冒頭・野ざらしを部分)



02_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》(大井川・秋の日の/道のべの/馬に寝て部分)



03_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》(伊賀・年暮ぬ部分)



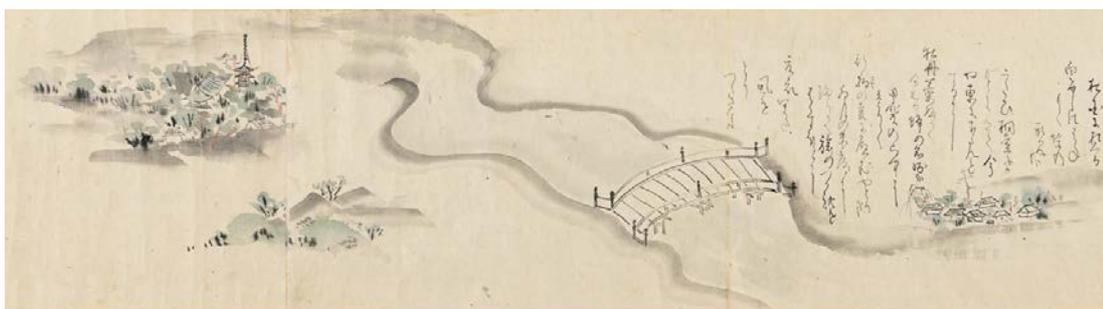
04_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》
(二月堂・春なれや/水とりや部分)



05_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》(秋風亭梅林・梅白し/櫻の木の_伏見・我がきぬに部分)



06_松尾芭蕉
《野ざらし紀行図巻》
(大津・山路きて部分)



07_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》(白けしに/牡丹蕊/甲斐・行駒の/江戸・夏衣部分)

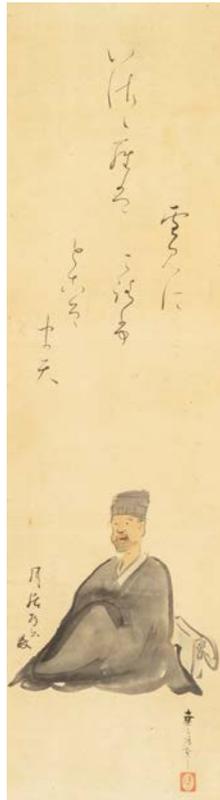


08_松尾芭蕉
《野ざらし紀行図巻》
巻子

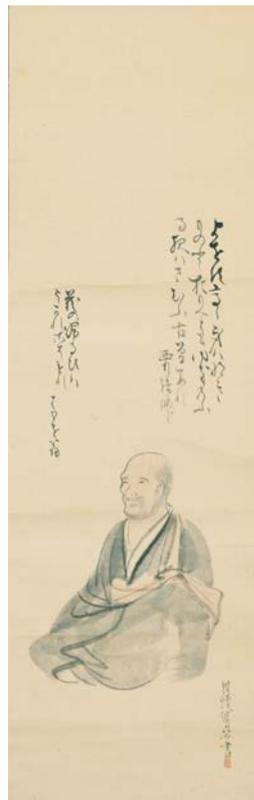
芭蕉と蕪村と若冲 プレス用画像一覧_2 (文華館展示)



09_与謝蕪村
《松尾芭蕉像》



10_中村芳中画
・江森月居 賛
《松尾芭蕉像》



11_呉春
《西行像》個人蔵



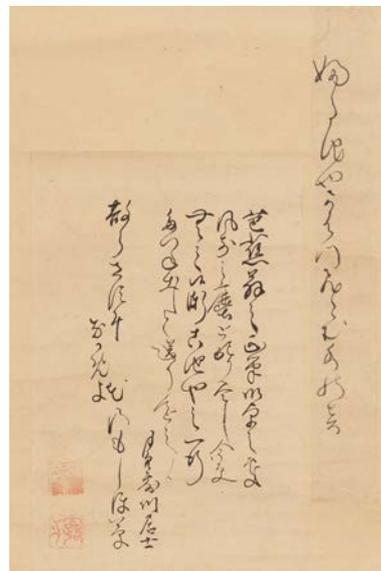
12_伊藤若冲画
・三宅嘯山 賛
《松尾芭蕉像》個人蔵



13_与謝蕪村
「春惜しむ」
自画賛



14_与謝蕪村「いかだしの」自画賛



16_松尾芭蕉「古池や」発句短冊・極書



17_呉春
《赤鬼画賛》



15_松尾芭蕉「朝顔に」自画賛



18_森川許六画
・松尾芭蕉 賛
「きりさめの」
発句画賛



19_伊藤若冲《蕪に双鶏図》



20_与謝蕪村《猛虎飛瀑図》



21_伊藤若冲
《托鉢図》



22_伊藤若冲 下絵・高遊外賛
《觸髅図》宝蔵寺蔵



23_伊藤若冲《月下芦雁図》



24_与謝蕪村《百老聚星図》

芭蕉と蕪村と若冲 プレス用画像一覧_4 (福田美術館展示)



25_与謝蕪村《茶筵酒宴図屏風》_上から左隻・右隻



26_伊藤若冲
《仔犬図》



27_伊藤若冲
《雲龍図》



28_伊藤若冲
《柳に雄鶏図》

嵯峨嵐山文華館について

百人一首の歴史と日本画の粋を伝えるミュージアム

1000年以上も前から歌枕として詠まれ、愛されてきた嵯峨嵐山の風景。当館はこの地で誕生したと伝えられる百人一首の歴史やその魅力と、日本画の粋を伝えるミュージアムです。石段を上がり、冠木門をくぐって足を踏み入ると、春はしだれ桜、初夏はサツキツツジ、秋は紅葉、冬は冠雪と、四季の美しさを楽しめる石庭。百人一首ゆかりの小倉山を背にし、大堰川を借景として取り込む2階からの眺めは、まさに日本画の世界のようです。



1階の常設展示では100体の歌仙人形（フィギュア）と歌の英訳が並び、藤原定家によって百人一首が選ばれた時から昨今人気の競技かるたに至るまでの変遷をご紹介します。

また2階には120畳の広々とした畳ギャラリーは、じっくり座って自由に鑑賞することも可能。石庭を望む明るいテラスにはカフェスペースが設けられており、景色を楽しみながらお寛ぎいただけます。



福田美術館について

美しい自然と日本美術の融和。日本文化の新たな発信拠点として

京都・嵯峨嵐山は古来歌枕でもある場所で、多くの貴族や文化人に愛され芸術家たちが優れた作品を生み出す源泉となってきました。福田美術館は「100年続く美術館」をコンセプトに、現代まで受け継がれてきた日本文化を次世代に伝え、さらなる発展へとつなぐ美術館を目指します。

オーナーである福田吉孝は京都に生まれ育ち、そこで事業を興し、今日まで続けてきたことに対し、地元の方々のご支援とこの地に恩返しをしたいという思いから、2019年10月、美術館の設立に至りました。今や日本国内だけでなく、世界中から多くの人々が訪れる観光地である嵐山。その中でも渡月橋を望む大堰川（桂川）沿いの景勝地に位置し、四季折々でそれぞれに変化する風景は1000年変わらず人々を魅了してきました。この美しい自然とともに日本美術の名品を愉しんでいただくことで、嵐山が世界有数の文化発信地となることを願います。



嵐山にふさわしい、未来へむけた日本建築の形

福田美術館の建築を手掛けた安田幸一氏は、「蔵」をイメージした展示室や外の自然とのつながりを感じられる「縁側」のような廊下など、伝統的な京町家のエッセンスを踏まえつつ、これから100年のスタンダードとなるような新しい日本建築を目指しました。また、庭には大堰川に連なる水鏡のごとく嵐山を映し出す水盤が設けられており、渡月橋が最も美しく一望できるカフェからは最高の眺めを味わうことができます。

